

Tess of the d'Urbervilles: テスの悲劇の形

Tess of the d'Urbervilles: The Shapes of Tess's Tragedy

内藤 歓修

Kanshu NAITO

要 旨

Tess of the d'Urbervilles は Thomas Hardy の後期の代表的傑作である。本作品の主人公 Tess Durbeyfield は貧しいが平凡な生活をしていた。ただ恵まれた美貌が禍となつて、この純真な女性を不幸に陥れて行く。美貌が故に苛酷な運命が誠実な彼女の生き方を変えて行き、悲劇に追いやる。彼女の道程を辿って、その悲劇の本質に迫りたい。

はじめに

'Justice' was done, and the President of the Immortals, in Æschylean phrase, had ended his sport with Tess.⁽¹⁾

本作品 *Tess of the d'Urbervilles* の最期の短いパラグラフはこの言葉で始まり、'A Pure Woman' と副題にあるように、純真な女性である Tess Durbeyfield は薄幸な女性として、波乱に満ちた若い一生の物語を終えている。彼女の一生の軌跡が、即ち、悲劇の道程であった。その行く先の果てに神々の司の'Justice'が待っている。どのような一生を辿って、Tess に 'Justice'が下されたのであろうか。その過程を考察し、悲劇の内容を追ってみる。

Tess of the d'Urbervilles は合計 59 章で 7 つの 'Phase'からなっている。それぞれの局面に表題を付けてあり、小説の展開につれて、主人公 Tess がいかなる局面に置かれるかを要約している。1 つの小説世界が展開して行くのに、登場人物の思想や行動が影響を与える割合を考慮する時、*Tess of the d'Urbervilles* はトマス・ハーディの小説の中で、際立って、主人公 Tess 1 人の影響が大きい。種々の事件は本作品では全て Tess に集中しているので、その内容は Tess の描写を軸にして、展開して行く単純な構成となっている。しかし、構成は単純であっても、極めて目の細かい繊細な印象を読者に与えている。緊密な構成は各局面において変化する自然が、各々の局面の感情と密接に結び付い

て調和することで生み出されている。ハーディの殆どの小説同様に、*Tess of the d'Urbervilles* においても主人公 Tess が自然に大きく影響を受けている。ここでの自然は豊かであり優しい半面、冷酷で無慈悲でもあるという複雑な表情を現し、Tess の心象風景と密接な関係を保っている。

1. 悲劇の誕生

物語は *The Maiden* と題された局面 I で美しい谷あいの丘陵地帯にあるマーロット村が舞台となって始まる。

五月下旬のある夕方、村はずれの路上でうらぶれた 1 人の中年の行商人が、向うから馬でやって来た牧師に、‘*Good night, Sir John.*’と Sir 付けで呼びかけられたことが物語の発端である。この男は Tess の父親 John Durbeyfield と言い、大酒呑みの怠け者なので、一家は貧しいその日暮らしであった。Parson Tringham は気紛れに、John は征服王 William の騎士 Sir Pagan d'Urberville の直系の子孫だと分ったと告げる。Tess の悲劇の種はこの時に蒔かれた。これを聞いて、有頂天になってしまった John は家人にそれを話す。無教養で無知な母 Joan は夫と共に大喜びする。

当日五月祭が行われていた。女性だけが白いガウンを着て、教区を行列してめぐり、緑の野に出て踊るのである。

作者は、それに加わっていた Tess に目を転じ、*her mobile peony mouth and large innocent eyes added eloquence to colour and shape* (第 2 章)と、彼女の魅力を描写している。彼女はロンドン仕込みの女教師の下で国民学校 3 年を卒えていて、標準英語と方言を使い分けた。だが、大人びた外見とは裏腹に、未だ心は純真な子供の状態であった。

村娘達のダンスが始まった頃、3 人の旅の兄弟が偶然通りかかり、末弟の Angel Clare だけがダンスの輪の中へ入る。暫く踊った後、彼は先に行った兄たちの後を追って去って行く。小高い所から後ろを振り返り、踊らなかった Tess の姿が見えた時思う：

Trifling as the matter was, he yet instinctively felt that she was hurt by his oversight. ... She was so modest, so expressive, she had looked so soft in her thin white gown that he felt he had acted stupidly. (ibid.)

Tess が戸外の祭の行事から早めに帰ると、心臓病のくせに酒呑みの父は祝杯を上げに出かけている。母も日頃のストレス解消のために、夫を迎える口実で酒場へ行ってしまう。このような家庭環境では一家の中心になるのは最年長の姉である Tess しかいない。翌朝未だ暗いうちに予定されていたカスターブリッジへの密蜂の巣箱運びの仕事は、父が酔いつぶれて動けないので、代りに Tess が弟 Abraham と行かざるを得なくなる。真夜中なので、居眠りをしている間に郵便馬車と衝突事故を起こし、一家の唯一の財産ともいべき老馬の Prince は死んでしまい、彼女は自分の不注意で一家の

生計を危機にさらしたことに非常な責任を感じる。

Tess は家の外に出て、働かざるを得ない状況に追い込まれてしまった。母親はトラントリッジに先祖の姓である d'Urbervilles を名乗る大金持ちの婦人が住んでいることを知り、Tess をそこに行かせて、親類の名乗りをさせようと考えた。

Tess は村のどこかの農場で農作業を手伝うかして働くことを望んだが、馬を死なせたという責任感から、母親の提案に同意した。自分の意志に反して、人生の最初の転機にかかろうとしている Tess は一歩々々未知なるものへと歩いて行く⁽²⁾。Tess が辿り着いた d'Urbervilles 家は実際には Tess の祖先とは何ら関係もなく、Tess の先祖の名を勝手に借用したのであった。Tess は d'Urbervilles 家が古い家柄であると思っていたのに、屋敷の全てが新しいのに驚く。この屋敷は周囲の自然とは調和しない異質なもので、ウェセックスの田園地帯にあっては場違いな存在である。d'Urbervilles の屋敷は、温室が象徴しているように、自然を物質と見なしそれを支配しようとする物質主義に根ざした産業資本主義的性格を現している。

Tess はその家の息子で、好色そうな Alec という青年と会う。作者はこの出逢いが悲劇を招くことを暗示している：

In the ill-judged execution of the well-judged plan of things the call seldom produces the comer, the man to love rarely coincides with the hour for loving. Nature does not often say 'See!' to her poor creature at a time when seeing can lead to happy doing; or reply 'Here!' to a body's cry of 'Where?' till the hide-and-seek has become an irksome, outworn game. (第5章)

Tess を一目見て好きになった Alec は積極的に行動を仕掛ける。彼は果樹園や温室を案内し、莓のへたを持って Tess の口に近付け、自分の手から直接たべさせたり、バラをとって胸に着けたりした。強引に彼女の肉体に介入を試みている。莓を食べさせる場面は微妙な象徴となっている⁽³⁾：

...Tess eating in a half-pleased, half-reluctant state whatever d'Urberville offered her. (ibid.)

強引な外からの働き掛けで肉体的に目覚めさせられ、Tess が罪悪感を覚え社会の枠からはじき出されて行く経緯は皮肉である。ここで Tess に与えられたものは全て、人工的にコントロールされた時期外れのものである。d'Urbervilles 家は自然を商品化している。Alec⁽⁴⁾も Tess と接する時、彼女を人格を備えた生きた人間として見なすのではなく男の欲望を満たすための単なる肉体的存在、物質的存在と見なしている。

暫くして、Tess を我が物にしようとする Alec の一存で、養鶏場で働くことになった。仕事に慣れた頃、Tess の一生を左右する事件が起こる。ある夜、使用人仲間とチェイスバラのダンスに行

った帰り道に、同行の女性達とトラブルを起こし、仲間から孤立してしまう。

Tess の危険な状況を待っていたかのように、Alec が馬に乗って登場する。彼女は危急から逃れるために、彼の邪心に薄々気付いていて用心していたのに、恐怖と憤慨を勝利に変えようと衝動的に Alec の手中に飛び込んでしまった。こういう誇り高さは Tess の特徴である。彼女の遭った悲劇的な災難の原因の 1 つには彼女の誇り高い性格も含まれている。馬で去る Tess を見て、1 人の女性が笑いながら、‘Out of the frying-pan into the fire’ (第 10 章) と言うが、Alec の日頃の行動を知る者にとっては、その結果は火を見るより明らかなことであつたろう。それはあたかも、猟師が獲物を仕留め、馬に乗せて持ち去る様子を髣髴させる場面である。世間知らずで、警戒心も、男性についての認識もない田舎娘が彼の策略に落ち、深夜彼女の先祖の御猟林であったチェイスという森に馬で連れて行かれ、肉欲の犠牲になってしまった。作者は彼女の運命の苛酷さを嘆いてみせる：

Why it was that upon this beautiful feminine tissue, sensitive as gossamer, and practically blank as snow as yet, there should have been traced such a coarse pattern as it was doomed to receive; why so often the coarse appropriates the finer thus, the wrong man the woman, the wrong woman the man.... (第 11 章)

2 人は暫く肉欲のみの関係が続ける。Tess にも肉の喜びはあつたようで暫く関係は続くが、彼女は心が伴わない肉体関係を嫌悪して Alec から逃げるようにして去る。Alec も一時的に Tess への肉体的興味が薄れたらしく、深くは追わずに彼女を手放した。Alec は物語の舞台を去る。Tess がトラントリッジから脱出するのは Alec の屋敷に来てから約 4 ヶ月、チェイスの森の夜から数週後、10 月末のある日曜の早朝である。Tess への肉体的代償は何もなく、Tess だけ大きな負担を抱えて、心身共に大きな傷を負ってしまった。Tess は家に帰った時、Alec に捕らわれられていた自分の気持ちを母に語る：

She had dreaded him, winced before him, succumbed to adroit advantages he took of her helplessness; then, temporarily blinded by his ardent manners, had been stirred to confused surrender awhile; had suddenly despised and disliked him, and had run away. (第 12 章)

絶望的状况から、彼女は自らの意志で行動を起こし、脱出したのである。女性特有の本能的な直感から、Alec の俗物性に結婚相手としての価値を認められなかった。実家への援助をほのめかして、金銭づくで快樂を追うといった肉欲に突き動かされて強姦した彼との結婚など考えられなかったのである。彼女は精神が伴わない肉の愛を拒絶して、進んで苦難の道を歩む道を取った。

2. 立ち直り

トラントリッジ脱出から1年有半(局面Ⅱ)は、Alecの肉欲の犠牲となった結果生じた、妊娠、出産、赤ん坊の死、埋葬などの問題に対処し、苦しい経験をした。局面Ⅱはこれからの再生の芽を胚胎して過去の年月の総括的反省の時期である。やがて、Tessは **Almost at a leap Tess thus changed from simple girl to complex woman.** (第15章)と作者が述べているように、単純な娘から複雑な女性に変貌して行った。作者はTessと密着したような文体で、中心的主題として提示している：

Was once lost always lost really true of chastity? she would ask herself. She might prove it false if she could veil bygone. The recuperative power which pervaded organic nature was surely not denied to maidenhood alone. (ibid.)

自らの生を肯定し、再生を期して積極的に生き、過去の屈辱から我が身を遮断し、忌まわしい記憶がまつわる土地を去り、新しい出発をする意志を固めたのである。自然界一般に認められる再生の力を阻もうとする人間社会に如何なる悲劇的要素が潜んでいるのであろうか。

トラントリッジ脱出後、2度目の春5月、立ち返る春は素晴らしく、発芽のうごめきまで聞えるようで、野の生き物を突き動かすようにTessを動かし、出発へと駆り立てる。Tessは南の方トールボセイズで夏場の乳しぼりを求めていると知る。生命が躍動に満ちているある朝、2度目の出発の門出に立つ。

Tessはこの搾乳場で夏の間だけの職を得た。夏場の牧場の仕事は朝が早い。Tessにとって、ここでの労働の日々は、受難後、生涯で最も幸福な時となった。

搾乳場に到着早々、Tessはかつてメイデイ・ダンスで会ったAngel Clareが偶然ここで働いているのを知る。福音派の牧師の息子ではあったが、新しい時代の進歩的な彼は、父の信仰とは相容れない考えを抱いていた。自分の主義主張に忠実に生きようとしており、精神の自由を犠牲にしなくても独立出来る農業を選び職業訓練をしているのであった。

この偶然の再会は猛毒を含んだ甘い蜜のようなものであった。廻りの乳搾りの娘達の心を虜にしている非常に魅力的なAngelと誰が見ても美しいと認めるTessが会って、恋に落ちないわけがない。しかも、時は生命の進むような季節で、若い男女を浮き立つ気分にする環境が準備されている。2人は間もなく愛し合う。地上の全てのものが感覚を持っていると見えるまでに、大気は微妙な平衡の中に保たれ、6月の典型的な夏の夕べ、庭のはずれで、Angelが中古のハーブをかき鳴らしている場面は印象的である。夕闇に白く、触れればパッと花粉⁽⁶⁾を散らす夏草、鼻を突くような臭いを発する、赤や黄や紫と輝かしい色とりどりの花を着けた雑草。それらをかき分けてTessはハーブの音調に魅せられて、猫のように忍びやかに近付いて行く。低く抑えられている絃の音調は自然と人間との生命の鼓動と流動を表す象徴となっている。Tessの魂はあたかも時空を超えた高まりの中にあるかのよ

うに、恍惚の状態に引き込まれて行く。彼女を取り巻く自然の生命力は旺盛で、進む茂みははじめはじめしている。その中を彼女は泡ふき虫の泡がスカートに着いても、足下のカタツムリを踏みつぶしても、アザミの乳液やナメクジのベトベトした粘液が両手に着いても構わず、Angel の許に進んで行く。自然の中で、心に何の制約もなく、ただ Angel の弾くハーブの調べに感動し陶醉する。(第 19 章)

作者は Tess が Angel と共にトルボセイズでの季節の進みと成熟と軌を一にして、*All the while they were converging, under an irresistible law, as surely as two streams in one vale.*(第 20 章)と描写している。Tess は早朝の朦朧とした水のような光の中で Angel にとって、最早単なる the milkmaid ではなく、*a visionary essence of woman – a whole sex condensed into one typical form* (ibid.)となった。

Tess と Angel が霊妙な魂の触れ合いを続けているうちに、その関係は具体化して行く。*How very lovable her face was to him. Yet there was nothing ethereal about it; all was real vitality, real warmth, real incarnation.*(第 24 章)と、作者は Angel が生身の Tess を意識して、愛するようになって行く所を描いている。ある昼休み、Tess は暫しの午睡から起き出て降りて来る所で彼がいようと夢にも知らずちょうどあくびをする。Angel は、午睡から目覚めたばかりで、未だ十分に覚醒し切っていない、極めて無防備な状態にある彼女の *the red interior of her mouth as if it had been a snake's* やうたた寝してほてった顔を見る。作者は半ば無意識の瞬間の意味を的確に捉えている：

The brim-fulness of her nature breathed from her. It was a moment when a woman's soul is more incarnate than at any other time; when the most spiritual beauty bespeaks itself flesh; and sex takes the outside place in the presentation. (第 27 章)

Tess は抽象的な存在から具体的な存在に変化し、女性が持つ肉感的魅力を無意識に表出している。トルボセイズの豊かな自然(Nature)に囲まれて、伸びやかに活動する Tess は無意識に自らの本性(nature)を顕現し、最も精神的な(the most spiritual)美が肉体(flesh)として具体的な形を表し、性(sex)はそのシンボルとして外に表われ出たのである。女性の魂(soul)が肉体を通して具象化した瞬間であった。Angel が Tess を抱いた時、彼女は服を着たまま午睡をしていたので *she was warm as a sunned cat.*(ibid.)と表現されている。自然と一体化している人間の存在は、読者に身近かで愛らしい生命の愛おしさを感じさせよう。Tess が眼をあげて Angel を見ると、彼は彼女の *the deepness of the ever-varying pupils, with their radiating fibrils of blue, and black, and gray, and violet*(ibid.)に見入った。作者は互に見つめ合う 2 人を Adam と Eve に譬え、この場面をエデンのモチーフに繋げている。これから 2 人は禁断の木の実を食べ、楽園追放の憂き目に遭うことになる。彼が Tess に求婚した時、彼を心から愛していた Tess にとっては、求婚は喜びに満ちた苦悩、禁断の木の実とも言えるものであった。辛い過去を持つ Tess は、如何に魅惑的な申し出であっても受け入れられない。

Tess's passing corporeal blight had been her mental harvest. (第 19 章)とされているように、最期には、自然の掟と人間存在のけじめをつけることから逃れられない。

しかし、Tess の拒否の理由が分からず、求婚は繰り返される。Tess は the thread of her life was so distinctly twisted of two strands, positive pleasure and positive pain(第 28 章)ことを知るが、Angel にはその都度拒否される求婚に、自分をじらしているだけだと思えない。'You seem almost like a coquette.'と半分苦々しく抗議する。彼の気持ちを害することに耐えられぬ、切ない思いを抱く Tess は'I will tell you my experiences – all about myself – all!'と約束をする。

almost a terror of ecstasy(第 28 章)の中で、self-chastisement の戦いも結局は自己保存という強い生命の叫びには屈してしまう。 'I shall let myself marry him – I cannot help it!' 'I can't bear to let anybody have him but me!' (ibid.)とあえぐ気持ちになるまでに到る。しかし、Angel と結婚したら、強姦された非処女という自分自身をどう彼に承認してもらうかが最重要問題であった。

Angel は秋も深まって行く頃、Tess と荷馬車で駅まで急ぎの牛乳運搬を自分から申し出る。雨になり暗くなったその帰途、Angel を熱愛している Tess は彼の繰り返される求婚を終に断り切れなくなって承諾する。この承諾の日は告白の最後の機会であったが、Tess は her instinct of self-preservation には遂に打勝てず、今回も先送りにしてしまった。一方、Angel は日頃の心情とは裏腹に Tess の血統を尊重しその元の名を名乗ってはどうかなどと提案し、またその名は以前近くのご獵林で父 Clare 牧師に乱暴を働いた男の名と偶然一致しているなどと言う。作者は Tess の気持ちを巧妙に追い詰めて行く下地を用意している。

結婚承諾後、幸せな時を過ごす Tess にとって、告白をめぐる根本問題は幸せな気持ちが深くなればなるほど、深く刺さって抜けない棘のように、大きな苦しみ種になって行く。とうとう結婚の日取りは大晦日と決定した。

Tess は告白の問題をこれ以上放置しておくことが出来なかった。Tess が Angel に贈られた結婚式のガウンを着た時、That never would become that wife That had once done amiss⁽⁶⁾ (第 32 章)と母が歌っていたお気に入りの民謡を思い出したり、Tess の過去を知る男が Angel と関わりを持ったことが drachm⁽⁷⁾(第 33 章)となって、打ち明けることを決心した。直ちに、便箋 4 ページ分にあの出来事を簡潔に書き記し、Angel の部屋のドアの下から差し入れる。しかし、次の日もその次の日も、彼の態度は変わらず、彼女に優しくかった。不審に思って、結婚式の当日、彼の留守中に部屋に入り確認すると戸口まで敷かれていた絨毯の下に入っていた。又もや運命の皮肉はこの手紙を彼の眼に触れさせなかった。結婚式の直前、Angel に告白しようとするが、時間がないと Angel に退けられて、そのまま結婚式は始まり、終わった。

3. 悲劇再燃

結婚式当日に歓喜の絶頂にいる 2 人に対して、その結び付きのもろさを暗示する数々の事柄が顕示

される。教会から出た 2 人を迎える古ぼけた馬車から、縁起でもない the legend of the d'Urberville Coach(第 33 章)が語られる。新婚の旅立ちに出発する午後、the white one [cock] with the rose comb が 3 度不吉な昼鳴きをする。結婚初夜を過ごすべく到着した d'Urbervilles 家の屋敷であった古い農家には 2 百年程前の d'Urbervilles 家の夫人のものという等身大の不吉な肖像画が石壁にはめこまれたまま残っていて、Tess をぎくりと立ち止まらせる。それは merciless treachery と arrogance to the point of ferocity(第 34 章)を見る者に印象付ける。このような小さな事件の積み重ねで不吉なゴシックの雰囲気作りがされる中、Tess の気持ちは沈み、自分は Mrs. Angel Clare となったが、道徳上から言えば、Mrs. Alexander d'Urbervilles(第 33 章)なのではないかなどと思いつく。

一方、Angel は新婚初夜に互いに秘密を持たないようにと、五分五分といった気楽さを与えるような様子で彼自身の告白をする。彼はロンドンにいた頃いかかわしい女と 2 日 2 晩の放蕩三昧に耽ったことを話す。自分の忌まわしい過去をどう告白すべきか苦しんでいた Tess にとって、作者は巧妙に Angel の懺悔の告白を用意して、Tess に告白をし易い環境を与えている。"it is as serious as yours, or more so." と不安がる Tess に、"It can hardly be more serious, dearest." と Angel は答える。

Tess はその言葉に勇気付けられ、"No, it cannot be more serious, certainly, because 'tis just the same!" と言い、Alec との経緯と結末を語って行く。ただ無邪気に、男性が許されることなら女性も許されるに違いないと信じていたのである。Tess には男女の立場の違いに関する認識が欠けていた。2 人を取り巻く外界の全てが不吉な様相を示す中で、極度の不安と緊張を以て Tess の告白が始まる。チェイスバラでの誘惑の場面と同様にここでも具体的な描写は省略されている。告白が進むにつれ、辺りの心なき物体さえ色を失い、火格子の火だけが鬼子のように打ち興じるようにも見えた。その場の異様な緊迫感と違和感の描写は読者を異次元の世界に追い込んで行くようである。作者は The ashes under the grate were lit by the fire vertically, like a torrid waste. Imagination might have beheld a Last Day luridness in this red-coaled glow...(第 34 章)と描写している。そして生まれる空白と沈黙。それまでの世界が一瞬にして崩壊したことを雄弁に伝えるのに効果的である。

Her narrative ended; ... But the complexion even of external things seemed to suffer transmutation as her announcement progressed. ... And yet nothing had changed since the moments when he had been kissing her; or rather, nothing in the substance of things. But the essence of things had changed. (第 35 章)

告白前と告白後の Tess は Angel にとって一瞬にして不連続なものとなって、全く違った存在になってしまったが、Tess 自身は一貫して変わっていない。これは Tess の身に起った出来事を許すかどうかの問題ではない。これまでの Tess に付いての彼の認識が完膚無きまでに破壊された結果生まれた驚愕の気持ちを如何にして鎮め、完全に変わってしまった Tess との関係をどのようにして改めて行

くかの問題である。

良妻賢母が当然の時代に Tess は結婚もせず男の情夫となり、私生児まで産んでいる。当時の世間一般の通念では、Angel のような良家の息子がこのような女性との結婚をすることが認められないことは、自明のことであつたらう。如何に進歩的生き方を標榜している Angel に対しても、彼だけを狭量だと責めるのは必ずしも正当であるとも言えない。男性優先の時代に、過去の行きずりの女性との経験を妻に告白するという行為はむしろ、彼が当時の男性には珍しい潔癖さを持っていたことの証明である。そんな彼が Tess が 1 度ならず Alec と交渉を持ったと聞かされたら愕然とするのも当然である。

ハーディは Angel の性格を動物的ではなく精神的で、想像的で霊妙 (ethereal) と分析していたが、Angel の抽象的な考え方に血が通う時が来た。‘Am I to believe this?’ とか ‘Why didn’t you tell me before? Ah, yes, you would have told me, in a way – but I hindered you, I remember!’ (第 35 章) などと言い、精神の混乱に追い込まれて、呆然となる。‘Forgive me as you are forgiven! I forgive you, Angel.’ と必死になって頼む Tess に対して、‘O Tess, forgiveness does not apply to the case! You were one person; now you are another. My God – how can forgiveness meet such a grotesque – prestidigitation as that!’ と答える。自分の放蕩を Tess に許してもらいながら、Tess の過去を許すことが出来ない。汚れた肉体を拒否し、更に全人格受け入れまで拒否する。Tess の側から見れば、この言葉は自分のことは棚に上げて、女性のみの純潔を望む男性の丸出しにされたエゴであるとも言える。

しかし、Tess は Angel を責めず、今までの自分たちの愛について訴える：

‘I thought, Angel, that you loved me – me, my very self! If it is I you do love, O how can it be that you look and speak so? It frightens me! Having begun to love you, I love you for ever – in all changes, in all disgraces, because you are yourself.’

この言葉に Angel は次のように答える：

‘I repeat, the woman I have been loving is not you.’

‘Another woman in your shape.’

それでは、Angel が愛した別の女性とは誰だったのか。ありのままの姿の Tess、人間としての Tess ではなかった。頭の中で理想化され、偶像化された女性像を Tess の上に重ね合わせて、自分で作り上げた幻の女性を愛していたのである。トールボセイズの牧場で夜明けの闇と光とが混じり合う幻想的な時刻に彼が Tess に名付けた Artemis や Demeter のような女性の理想の姿であった。彼が両親に

Tess の話をした時に、彼女を次のように描写している：

‘She’s brim full of poetry – actualized poetry, if I may use the expression. She *lives* what paper-poets only write....’ (第 26 章)

この説明にも見られるように、Angel が愛したのは個人の人格と歴史を持つ生身の人間としての Tess ではなく、詩に現れるような非現実的女性に過ぎなかった。ハーディは Angel の性質と共に彼の愛の内容について述べている：

...he was, in truth, more spiritual than animal; he had himself well in hand, and was singularly free from grossness. Though not cold-natured, he was rather bright than hot – less Byronic than Shelleyan; could love desperately, but with a love more especially inclined to the imaginative and ethereal....(第 31 章)

Tess の告白によって、幻想を打ち砕かれた Angel は目の前にいる現実の人間として Tess を受け入れて愛することが出来ない。

温室育ちの彼は今までの経験を超える厳しい現実と直面した時、対処の仕方が分からずに、奥深いところに根差している、父の教えに拠り所を求めるしかなかった：

With all his attempted independence of judgment this advanced and well-meaning young man, a sample product of the last five-and-twenty years, was yet the slave to custom and conventionality when surprised back into his early teachings. (第 39 章)

結局、彼は本質的にはキリスト教の教義や当時の因習的な道徳、価値観に縛られた人間であることが明白になった。a sample product と述べられているように、Angel は時代の典型的な男性像であった。妻の Tess は自分の過ちが彼のものと本質的に異なることはないのになぜ許してくれないのかと迫っている。彼の不明確な返答に見られるように、Tess は人間的な深さでは完全に Angel を凌いでいる。

Tess は一生懸命に自分の立場を説明する。‘I have not told of anything that interferes with or belies my love for you. ... It is in your own mind what you are angry at, Angel; it is not in me. O, it is not in me, and I am not that deceitful woman you think me!’(第 35 章)と述べ、Angel にも間違いがあったので自分の過去の傷が相殺されると言っているのではなく、人間の心の在り方の本質を主張しているのである。‘I was a child – a child when it happened! I knew nothing of men.’と訴えると、Angel は ‘You were more sinned against than sinning, that I admit.’と答える。Tess が被害者であ

ることは認めるが、彼女を赦すことは出来ない。彼は、当時の典型的な男性と同様に女性は純潔を守るべきであるという認識から離れられない。階級社会は堅固であり、階級差が道德観の差ともなっていた。そのため、Angel は 'Different societies, different manners. You almost make me say you are an unapprehending peasant woman, who have never been initiated into the proportions of social things.'(ibid.)と言う。理想主義者であり、牧師の息子である Angel にとって、聖職に就かないにしても、他者を赦すことは重要なことであろうが、Tess の過去を赦せない。

彼は因習的であると共に、人一倍頑固でもあった。普通の男性なら悲嘆にくれる Tess の姿を見て、彼女を許す気持ちになったであろう。しかし、彼の心の中にある固い論理の層が断固としてそれを拒んでいた:

...there lay hidden a hard logical deposit, like a vein of metal in a soft loam, which turned the edge of everything that attempted to traverse it. (第 36 章)

悲嘆に暮れる Tess に向かって、'It isn't a question of respectability, but one of principle!' (ibid.)とか、'How can we live together while that man lives? – he being your husband in nature, and not I.'と愛情のない言葉を投げつける。結婚したからには、後ろ向きな考えは裁ち切り、深い愛情を以て困難に立ち向かえば道は開けるであろうに、否定的要素ばかり挙げて、自分たちを苦境に追い込んで行く。

次の朝には、あれほど燃え上がった情熱の炎は今や灰燼に過ぎなかった。Tess の愛は飽くまで受け身の立場の愛であり、私利私欲のない愛を捧げているなどと、彼女の愛の本質が述べられている。一方、愛の主導権を握っている Angel の愛の特質は肉体を伴わない愛の範疇に属している:

Moreover, his affection itself was less fire than radiance, and, with regard to the other sex, when he ceased to believe he ceased to follow: contrasting in this with many impressionable natures, who remain sensuously infatuated with what they intellectually despise. (ibid.)

現実における愛と、頭の中に作り上げた理想の愛とのギャップに彼は気付いていない。

告白後 3 日目の明日から当分別居するというその晩、Angel が夢遊病状態になって Tess の寝室に現れる。'Dead! Dead! Dead!'と呟き、'My poor, poor Tess – my dearest, darling Tess! So sweet, so good, so true!'(第 37 章)と言いながら唇にキスして、シーツにくるみ、深い悲しみを湛えた眼差して抱きかかえて歩いて行った。近くの僧院の廢墟の石棺の中にそっと Tess を横たえると、自分もそばの地面に並んで、死んだように深い眠りに落ちた。心の深層に抑圧されていた Tess への深い愛情が、就寝中に解放されて、Angel に行動を起こさせたのであろう。だが、Angel は翌朝起きた時には、何

も覚えていない。Tess の馬車が去って行くのを見ながら、‘God’s *not* in his heaven: all’s *wrong* with the world!’ (ibid.) と Angel はつぶやく。このような結果を招いた自分の責任は全く感じていない。

Angel のこの狭小な人間性やひ弱さは彼の思想的な新しささえも疑わせる。農場経営を選んだのは思想的な自由を犠牲にせずに独立出来ると思ったからであったが、農場経営者としての実績は不明である。幾つかの農場で研修はしているが、どれも見習い程度のものである。地に足が着いていない Angel の進歩的知識人としての姿は脆弱に映る。思想的、精神的自由を謳い、家系や地位や富といった現実的栄達を否定しているが、Tess の過ちの問題に遭遇すると途端に因習的になってしまう。

Tess は実家に帰って一部始終を母親に話す。母は以前、手紙の中で過去のことは言うてはならない旨言っておいたのに、なぜ告白したのかとなる。Tess は愛する人を偽り自分の過去を隠し通すには余りにも良心的で正直であった：

‘I could not help it! He was so good – and I felt the wickedness of trying to blind him as to what had happened! If – if – it were to be done again – I should do the same.’ (第 38 章)

4. 苦難の連続

Angel と別れた Tess は次第に経済的追い詰められて行く。11 月のある午後、トールボセイズの仲間 Marian の手紙を頼りにフリントコウム・アッシュの農場へ冬場の仕事を求めて歩いて行く：

With the shortening of the days all hope of obtaining her husband’s forgiveness began to leave her: and there was something of the habitude of the wild animal in the unreflecting instinct with which she rambled on – disconnecting herself by littles from her eventful past at every step....

(第 41 章)

この絶望的な描写はあらゆる面で追い詰められている⁶⁹Tess の姿を実感として、読む者の脳裏に訴えかけている。

フリントコウム・アッシュの冬の農場は石ころだらけの石灰岩の丘の斜面にあり、作物は麦と蕪だけの荒地であった。Tess は蕪掘りなど、苛酷な肉体労働に夜明けから日没まで追われて行く。刺すような冷たさを持った雨は横殴りに、ガラスの破片のように吹き付けて来る。寒さが高じると、厳しい黒い霜がやって来る。作者の筆は全て追い詰められる Tess の試練へと次第に集中して行く。

Angel の両親に現在の苦境を相談するため、Tess はエミンスターへ出かけたが、牧師館の人々は日曜礼拝に出席していて会えなかった。帰路の途中に、偶然 Alec と出会ってしまう。Alec は改心して村人の前で説教をしていた。肉欲の権化である Alec は Angel の父 Clare 牧師の影響を受け、一時的に改心した伝道者となっていた。これを契機に、辛い労働に明け暮れる Tess の許に、Alec は頻繁に

現れて執拗に復縁を迫る。Tess への情欲が復活し、執念深い獵師のように、彼女の家の経済的困窮につけ込み、財力で彼女を身動きの取れない状態に追い込んで行く。ハーディは Tess の既に断ち切られているべきであった関係の根の深さを分析している：

...the break of continuity between her earlier and present existence, which she had hoped for, had not, after all, taken place. Bygones would never be complete bygones till she was a bygone herself. (第 45 章)

最初に会った日に、Tess は彼との間に出来た私生児 Sorrow の生と死のことを告げる。すると、数日後 Tess が蕪削りをしている所に、彼は結婚許可証を携えて現われた。アフリカで伝道に身を捧げることが決意していて、伝道に Tess を妻として連れて行きたいと言う。Tess は彼の申し出を断固として断る。次には、2月2日の聖燭節の休日に、カスターブリッジの市で説教する予定を放棄してやって来る。Alec は宗教的信念に基づく社会救済への道を邁進していたが、Tess の a maddening mouth 等の性的魅力を前にして、その志は泡のように消えてしまった。

3月に入って、農場では早朝から最後の小麦塚の脱穀が急がれている日に Alec が姿を現す。Tess は苛酷な労働に心身共に極限状態にいた。昼食時に、伝道者から一変して昔ながらの姿をした Alec は Tess に接近し、彼女の腰へ腕を差し伸べようとする。Tess はすぐ反応して膝の上に置いていた革の長手袋で、力いっぱい Alec の顔を打った。Alec の唇には深紅の血がにじみ出し、わらの上にしたたり落ちる。これは Tess が後で彼を刺殺する場面への明確な布石となっている。Tess は絶望的に言う：

'Now, punish me!' she said, 'Whip me, crush me; I shall not cry out. Once victim, always victim – that's the law! (第 47 章)

この後、Alec は 'I was your master once! I will be your master again. If you are any man's wife you are mine!' と自分の権利を主張している。

その頃、妹 'Liza-Lu から母親大病という報が来たので、Tess は仕事を辞めて、急いで帰郷する。暫くすると、母の病気は治るが、元々強健ではなかった父の方が急死してしまう。彼の死によって3代限りの家と土地の賃貸借契約(lease)が切れてしまい、彼らは故郷の土地と住みかを失ってしまう。一家は祖先の墓のあるキングスピアに家を借りることにしたが手違いで、その家がふさがってしまった。多くの子供を抱えた Tess たちは切迫した状態に追い込まれる。路頭に迷った Tess の前に又しても Alec が現われる(第 52 章)。Tess はこうした事態と状況の下で、家族を救うために心ならずも Alec の援助の手を受け入れざるを得ない。Alec は的確に獲物を追い詰め、Tess を再び手中に収める。Yet

a consciousness that in a physical sense this man alone was her husband seemed to weigh on her more and more. (第 51 章)という言葉が実感となって行く。心の結び付きのない肉だけの関係にまでもや追い込まれてしまった。

新天地を夢見てブラジルに渡った Angel には、期待とは裏腹の厳しい自然条件が待っていた。異国の地で病気をしたり、苦労を重ねたりしているうちに、道徳の古い評価を疑い始め、訂正を加える必要があると思った：

Still more pertinently, who was the moral woman? The beauty or ugliness of a character lay not only in its achievements, but in its aims and impulses; its true history lay, not among things done, but among things willed.

How, then, about Tess? (第 49 章)

Angel がこうして、内省をしているうちに、偶然出会った心の広い男は彼に向かって ‘what Tess had been was of no importance beside what she would be.’なので、「彼がテスから去ったのは間違いである」と言った。翌日、雨に打たれて熱病に倒れた彼は程なく死んでしまったが、Angel には深い啓示を残した。古い価値観の道徳に囚われていた偏狭な精神を恥じ、Tess に対する愛情と同情の念を抱いてブラジルから帰国した。

5. 悲劇の形

故郷の牧師館に来ていた手紙から、Angel は Tess の窮状を知った。Angel は不安を覚え、Tess の母を苦心して訪ね当て、Tess の居所を知る。サンドボーンに居る Tess を漸く探し当てた Angel は玄関先で彼女と顔を合わせる。やつれ果てた Angel と天性の美を備えた Tess が再会時に交わす最初の会話は印象的である：

‘Tess!’ he said huskily, ‘can you forgive me for going away? Can’t you – come to me? How do you get to be – like this?’

‘It is too late,’ said she, her voice sounding hard through the room, her eyes shining unnaturally.

‘I did not think rightly of you – I did not see you as you were!’ he continued to plead. ‘I have learnt to since, dearest Tessy mine!’

‘Too late, too late!’ cried, waving her hand in the impatience of a person whose tortures cause every instant to seem an hour. ‘Don’t come close to me, Angel’ No – you must not. Keep away.’ (第 55 章)

かき口説く Angel に、絶望的な気持ちで 'too late' と繰り返す。Angel は最後に 'it is my fault!' と叫ぶが、現実には変えられない。Tess はこの場面で、4 回も立て続けに 'too late' という言葉を発している。Angel に魂の底から会いたいと思い、自分の所へ帰って来てくれと望んでいたが、やっと会えたのが、自分が他の男性と一緒にってしまった後であった。Tess は、時間のずれがどんなに重大なものか、どんなに悲劇的の意味を持つものか、絶望の内にはっきり認識していた。悲劇の種から芽生えたものはここに到って、人の手では摘み取ることが出来ないまでに成長し切っていた。

Angel が失望して去った後、Tess の心の中には今までの色々な出来事や、Angel への愛と Alec への憎しみの感情が急激に膨脹して来た。Tess は Alec に言う：

'And then my dear, dear husband came home to me...and you said my husband would never come back...And at last I believed you and gave way! ...And then he came back! Now he is gone. Gone a second time, and I have lost him now for ever ...again because of - you!' ...O, you have torn my life all to pieces...made me be what I prayed you in pity not to make me be again! ...My own true husband will never, never - O God - I can't bear this!' (第 56 章)

この言葉の中に Tess の感情の全てが表白されている。読者はここに悲劇の全容を理解し、Tess が次にどんな行動に出るか予感するであろう。Tess は肉切り包丁を手に持ち Alec の心臓を一突きにしよう。今までの憎しみや恨みをこの一突きに集めたのである。そして、急いで Angel の後を追う。

6. 悲劇の本質

Angel の帰国から、Alec 殺害に到るまでの展開は不自然な程急激である。殺害の現場の描写はなく、Tess の強姦や初夜の告白などの重大な場面と同様に語られているだけである。Alec 殺害は、物語の転換期に、屢々語られる the family tradition of the coach and murder を生み出した家系に伝わる、気性の激しさの故とされる。人を殺したのに、Tess は罪の意識におののくどころか、嬉し泣きをして、「やっと満足したようであった」(第 57 章)と描写されている。Alec が自分と Angel の間を裂いたので、彼を殺すことで Angel と再び結び付けられたと考えている。深く考えずに、偏に思い詰めて直情径行な行動をするという点で、'A Pure Woman' が持つ一側面を示しているとも言えよう。

Angel が Tess を訪ねた時、彼が見た彼女の姿は精神のない屍体のようであった。his original Tess had spiritually ceased to recognize the body before him as hers - allowing it to drift, like a corpse upon the current, in a direction dissociated from its living will.(第 55 章)と感じる程、様子が変わっていた。豊穡なトルボセイズ酪農場での生き生きとした姿と打って変わり、不毛な冬のフリントコウム・アッシュでは厳しい環境に肉体までも否定されてしまった。その上、Tess は家族を経済的に

救うため、やむなく Alec に再び身を任せざるを得なくなり、精神と肉体を分離させ、精神の伴わない肉体だけで彼と結び付く。そのため、精神が拘束され、膠着状態に陥っており、機能が停止していたが、恋しい Angel と再会出来た時、彼に会った強い衝撃で再び精神が甦り、動き出した。精神と肉体が切り裂かれた状態ではなく、精神と肉体を統合し、彼と固く結び付かなければならないという思いに激しく駆られたのであろう。

それ故、障壁となっている Alec を殺害し、Angel の許へ帰るという形で精神と肉体の分裂を回避しようとした。Tess は元来、独立不羈、自立心に富んだ女性である。家庭の窮地を救うために肉体的な犠牲を払って、Alec の言いなりになって来たが、心までは彼のものになってはいなかった。余りにも悲惨な Angel の姿を前にして、自分の魂も肉体も彼に捧げなければならないという思いがこみ上げて来て、肉体的なしがらみから解き放つために、反社会的な方法をも辞さずに、Alec と訣別したと言えよう。肉体と心が分離した Alec との生活は彼女にとって死んでいるのと同様であった。それ故、Alec 殺害は自己の再生のためにも、十分に必然性のあることであった。‘A Pure Woman’の‘Pure’が肉体的な意味で‘Pure’かと言えば否であろうが、精神上では‘Pure’であったと言って過言ではない。しかし、犯罪は否定出来ない。Tess が断罪されるのは避けられない。

Alec 殺害の後、Angel を追い掛けた Tess は彼に殺害を話す：

‘I have done it – I don’t know how,’ she continued. ‘Still, I owed it to you, and to myself, Angel. I feared long ago, when I struck him on the mouth with my glove, that I might do it someday for trap he set for me in my simple youth, and his wrong to you through me. He has come between us and ruined us, and now he can never do it any more. I never loved him at all, Angel, as I loved you.... I thought as I ran along that you would be sure to forgive me now I have done that.... I could not bear the loss of you any longer – you don’t know how entirely I was unable to bear your not loving me!’ (第 57 章)

Tess は Angel に自分の思いのたけを必死に吐露する。Angel はこれを聞いて、

‘I will not desert you! I will protect you by every means in my power, dearest love, whatever you may have done or not have done!’

と言うが、殺人事件が起きた今、Angel が出来る事は少ない。Tess が絶望的な気持ちで口にした‘too late’という言葉通りである。彼らは追手を逃れるため、逃避行を続ける。Tess の物語の行き着く所は彼女自身の死であるが、その前に彼女は束の間ながら幸福を許されている。人目を忍んでの、怯えながらの一週間ではあったが、Tess は Angel との愛を確認して最高の幸せを味わった。短い逃避行の

果てにストーンヘンジに辿り着いた。Tess は先史時代の異教徒が遺した巨石を褥に、短い安らぎの眠りを得た。満ち足りた表情をして、警官に引かれて行く Tess は、自分の一番いい所だけを持った、すらりと美しい妹'Liza·Lu を夫 Angel に託した。

Alec 殺害の後、Angel との最期の逃避行中に辛うじて体験出来た「肉体」と「精神性」の完全な調和の上に成り立つ結婚を Tess は理想としていたが、Tess の持つ異教性のためか、キリスト教国であるイギリスではとうとう実現出来ず、社会から排除され、死を迎える。‘Justice’ was done, and the President of the Immortals, in Æschylean phrase, had ended his sport with Tess. (第 59 章)と作者が言うように、the President of the Immortals によって弄ばれて、引用符付きの‘Justice’が下された。Tess の肉体は死刑によって失われたが、彼女の純粋な愛を、その精神を知った Angel と Tess に生き写しの妹'Liza·Lu が、これから実現するであろう予感を以て Tess の悲劇は終わっている。

注

- (1) Thomas Hardy: *Tess of the d'Urbervilles*, The New Wessex Edition, ed. P. N. Furbank; London: Macmillan, 1981 Hardcover を使用。引用は本文中に章数を示す。
- (2) Guerard, Albert J. (ed.): Hardy; A Collection of Critical Essays: Dorothy Van Ghent: *ON TESS OF THE D'URBERVILLE*; London: Prentice-Hall International, 1986, p.85
In *Tess*, of all his novels, the earth is most actual as a dramatic factor – that is, as a factor of causation.の指摘がある。
- (3) Howe, Irving *Thomas Hardy*: New York: Collier Books, 1973, p.115
There is a marvelous passage in which Alec, during their first meeting, plies her with strawberries, insisting that he himself pop them in her mouth and meanwhile adding rose blossoms “to put in her bosom.” One of those symbolic miniatures at which Hardy is so masterful, the passage radiates with suggestions of dominance, patronage, sexuality. Tess, stirred and bewildered, “obeyed like one in a dream.” とシンボリックな縮図についてハーディの巧妙さを挙げている。
- (4) Brown, Douglas: *Thomas Hardy* (rpt.): Westport: Greenwood Press, 1980, P.91
Alec を “The masquerader, the economic intruder, the representative of processes at work destroying the bases of agricultural security, stands with the spiritual intruder.” と述べている。
- (5) Howe, *ibid.* p. 121
The metaphor of “pollen” weaves through the courtship scenes, linking natural fecundity and human desire.と指摘している
- (6) Hardy, *ibid.* p. 430 ‘The Boy and the Mantle’の一節
- (7) Hardy, *ibid.* p. 431 Small weight を意味する
- (8) Guerard, *ibid.* p. 60: John Holloway; *HARDY'S MAJOR FICTION*;
Tess of the D'Urbervilles also has unity through a total movement; and the nature of this may also largely be grasped through a single metaphor. It is not the taming of an animal. Rather it is the hunting of one. と指摘している。追いつめられた Tess は “her hunted soul” (41 章)と表現されている。